「ルール違反」

―二稿―

2025/9/30

脚本 太郎

〈人物表〉

高城　充　（42）　スーパーの店長

淀川　文夏　（19）　スーパーのバイト。大学一年生

木原　春人　（19）　スーパーのバイト。大学一年生。淀川の恋人。

木原　秋人　（50）　木原春人の父。タクシー運転手

1. スーパー・裏口（夕）

郊外にある一般的なスーパーのチェーン店の裏口。
外壁にもたれて高城充（４２）が電話している。スマホを握り締め、泣きそうな顔で電話相手と口論している。

2. スーパー・青果売り場（夕）

入口付近にある青果売り場。
壁に掛けられた時計は１９時を指している。
店内はそこそこの混雑。
バイト店員の木原春人（１９）と淀川文夏（１９）、品出しをしている。
店員たち、口々に「いらっしゃいませ、こんばんは」と挨拶している。
高城、苛々した、落ち着かない様子でバックヤードから出てくる。
木原、高城に気付くと、露骨に緊張した様子に。

木原　「い、いらっしゃいませ、こんにちは」
言った直後、しまったというように口を押さえる。
高城、信じられないといった表情で固まる。
木原、高城と目が合い、狼狽した顔になる。
高城、怒気をどうにか隠そうとするように顔を引きつらせながら木原に詰め寄る。

高城　「木原くん……君は正気か？」
木原、狼狽して、

木原　「店長、あの、すみませ――」
高城、ワナワナと震えながら木原を遮って、

高城　「時間って概念知ってる？　あと時計読める？」
高城、ブルブルと震える手で時計を指さし、

高城　「どんな神経してたら１９時に『こんにちは』なんて抜かせるのかマジで理解できないんだけどさ」
木原、泣きそうな表情になる。
淀川、心配そうに木原を見ている。
高城、目を見開き、色んな角度から木原の目を覗き

込むようにする。

高城　「挨拶ってさ、基盤じゃん。社会の。間違えようがねぇじゃん。こんな基本中の基本のルールも守れないような奴がさ……」

胸を掻きむしるように苦悶しながら言葉を絞り出す。

高城　「俺と同じ生物なんて耐えらんねーんだよ。人間やめてくんねえかな？」

木原、泣き崩れる。

淀川が木原に駆け寄る。

高城、大きく溜息を吐いて、蔑むように木原を見下ろす。

高城　「もう帰ったら？　君人間向いてねーからさ、働かなくて良いよ。てかそれ以前に生きなくて良いよ」

高城、バックヤードに向かう。

高城　「うん、生きなくて良い」

周囲の客の軽蔑の目や店員たちの困惑の視線が高城に向いている。

それに気づいた高城、ハッとして、

高城　「あ、いやその……ちょっと言い過ぎたきらいはあるかもしれないけども……」

逃げるようにバックヤードに去っていく。

3.

セレモニーホール・葬儀場（昼）

遺影は木原のもの。参列者は少なめ。

淀川、椅子に座り、死んだような表情で木原の遺影を見つめている。

やがて、背後から何者かが淀川に近付いてくる。

その人物、淀川の肩に手を置く。淀川、振りむく。

4.

スーパー・バックヤード（夕）

高城、テーブルに置かれたノートパソコンに向かって何食わぬ顔で事務作業をしている。

淀川、ロッカーに鞄を仕舞いながら、無表情で高城の方を見ている。

高城、淀川の視線に気づき、訝し気に、

高城　「何だよ」

淀川、僅かに沈黙し、

淀川　「いえ別に。お疲れ様です」

高城　「あっそ。別に疲れてないけどね」

淀川、無表情に高城を見つめ続ける。

高城、気味悪そうに目を逸らす。

スマホの着信音。

高城、スマホを取り出して、発信先を見ると、嬉しそうに笑う。

電話に出る。

高城　「もしもし？　うん？　いやいやいやいや、俺の方こそこないだは言い過ぎたよ」

淀川、眉を顰める。

高城　「うんうん、もちろん。愛してる愛してる。あ、来週の土曜なら平気――」

淀川、憎悪の表情。

5.　アーケード街（夕）

今にも雨が降り出しそうな曇り空。

高城が一人で歩きながら、スマホを手に、楽しそうに電話している。

ふと、何かに気付いたようにハッとする。

後ろを振り返る。

視線の先には誰もいない。

高城、訝しげな表情のまま前を向く。

電話を再開し、すぐに笑顔になる。

高城の背後の建物の陰で、淀川が誰かと通話している。

×　×　×

ポツポツと雨が降り出す。

6.　交差点（夕）

雨が強く降っており、雷も鳴っている。

高城が、交差点付近を通りかかったタクシーに向かって小走りで近付き、手を振る。
タクシーがハザードを点け、徐行で路肩に寄せる。
後部座席のドアが自動で開く。

7.

タクシー・車内（夕）

高城、慌ただしくタクシーに乗り込む。

高城　「（雷の音でかき消される）……まで」

直後、人が乗り込んだような振動と揺れ。
隣を振り返ると、淀川が座っている。彼女は無表情で高城を見つめている。

淀川　「こんなとこでタクシー停めたら危ないじゃないですか、店長」

高城、驚きで言葉を失う。
淀川、口元だけで笑う。

淀川　「こんにちは、奇遇ですね」

タクシーのドアが自動で閉まる。

淀川　「いけない、今の時間だとこんばんはでしたね。間違えちゃいました。これじゃ、わたしも死なないとですかね、店長？」

高城　「お前、何で――」

タクシーが急発進する。

淀川　「運転手さん、（雷の音でかき消される）……までお願いします。　全力でブッ飛ばしちゃって良いんで」

運転手である木原秋人（５０）、憎悪を押し殺したような声で、

秋人　「かしこまりました」

タクシーがどんどんスピードを上げていく。
高城、手すりを掴みながらどうにか体勢を保っている。

高城　「おい、いくら何でも速すぎ――」

高城、前を見てギョッとする。
交差点。対面の信号は赤。

高城　「停まれ、停まれ停まれ停まれっ。停まれっつってんだろ

馬鹿野郎！」
タクシーは速度を上げながら交差点に進入。凄まじい数のクラクションを鳴らされる。複数の派手なブレーキ音と衝突音。
そのまま交差点を抜ける。
高城が後ろを振り返る。
交差点の方では事故車が何台か停車し、煙が上がっている。
高城たちの乗るタクシーは奇跡的に無傷で通過していた。

高城　「お前ら、ど、どういうつもりだ？」
淀川　「決まってるじゃないですか。ペナルティですよ。わたしたち全員、ルールを破ったんですから」
高城、語気を強めて、
高城　「何がルールだあんぽんたん。まず交通ルール守れよ」
秋人　「嫌だな、お客さん。今更交通ルールなんてどうでも良いじゃないですか」
高城　「はぁ？」
前に踏切が見えてくる。
淀川　「そうですよ。わたしたち、それよりもずっと大事なルールを破っちゃったんですから」
高城　「何の話だよ？　さっきの挨拶のこと言ってんなら――」
淀川　「違ぇよハゲ」
淀川、高城の腕を掴む。
ギリギリと握り締める。
高城に顔を近づけ、押し殺した声で、
淀川　「人を傷つけちゃいけないっていう、人として当たり前のルールだよ」
高城、気圧されて何も言えない。
タクシーは踏切の中に侵入し、真ん中で停車する。
すぐに「カンカン」という警報音が鳴りだし、遮断機が降りる。
高城　「おい……何でこんなとこで停まってんだよ、早く出せよ」
秋人　「良いんですよ、お客さん」

高城　「何が良いんだよ、踏切鳴ってんだろうが」
秋人は無言。
高城　「おい！」
高城、そこで秋人の名札に目が留まり、絶句する。
名札には、「木原秋人」とある。
秋人、振り返る。
憎悪の籠った笑み。
秋人　「ここが目的地ですから」
淀川も同じように憎悪の籠った笑みを浮かべる。高城の手を掴んだまま。
高城、秋人から目が離せず、
高城　「アンタ、その苗字……」
秋人　「息子がお世話になってまーす」
秋人、軽くお辞儀する。
そして思い直したように、
秋人　「いや、『ます』じゃなくて『ました』か。あいつはもういないから」
直後突然ヘラヘラと、
秋人　「間違えちゃった～。いやぁいかんいかん、店長さんはこういうのに厳しいらしいからなぁ。（わざとらしい笑い）」
高城、無言。
秋人、急に真顔になると顔を突き出し、
秋人　「何とか言えや」
高城、ドアを振り向き、ロックを外して開こうとするが開かない。
淀川が高城の手を強く引く。
淀川　「逃がしませんよ」
乾いた笑み。
高城、淀川の手を振り払う。
淀川の髪を掴み、反対のドアに叩き付ける。苦鳴。
何度も繰り返すと、彼女は動かなくなる。
高城、明人を睨む。
明人、嘲笑の表情で、

明人　「で？」

右から電車の走行音が聞こえてくる。

高城、怯みながらも何とか威圧的な態度を保ち、

高城　「てめぇもこうなりたくなきゃ、さっさと車を出せ」

明人、馬鹿にしたような態度で、

明人　「かっしこまりましたぁ」

8．踏切・外観（夕）

タクシー、僅かにバックして、

右に曲がる。

そのまま走り出す。

高城の声「そっちじゃないそっちじゃないそっちじゃないそっちじゃない」

秋人の馬鹿笑い。

電車が迫ってくる。警笛の音。

激しい音を立ててブレーキが踏まれるも、明らかに

手遅れ。

暗転。

凄まじい衝突音。

終